三一新書 496

# シャドウマン／夜の旅人

邦光史郎著

邦光史郎
くにみつ　しろう
1922年　東京に生まれる
高輪学園出身
戦時中「新作家」同人
戦後「文学地帯」社を主宰
十五日会に属し「文学者」同人，「京都文学」同人を経る
著書　『社外極秘』（三一新書）『色彩作戦』（三一新書）『欲望の媒体』（三一新書）『負けるが勝ち』全三部（三一新書）『泥の勲章』（講談社）『仮面の商標』（ポケット文春）『重役紹介会社』（三一新書）他
現住所　京都市左京区北白川伊織町 25-1

夜の旅人／シャドウマン　定価 280 円

1965年10月25日　第1版発行
1965年11月1日　第2刷発行

著者 © 邦光史郎
1965年

発行者　竹村一
印刷所　同興印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社

発行所　株式会社 三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京 (291) 3131～5番
振替東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 496

# 夜の旅人

## シャドウマン

邦光史郎著

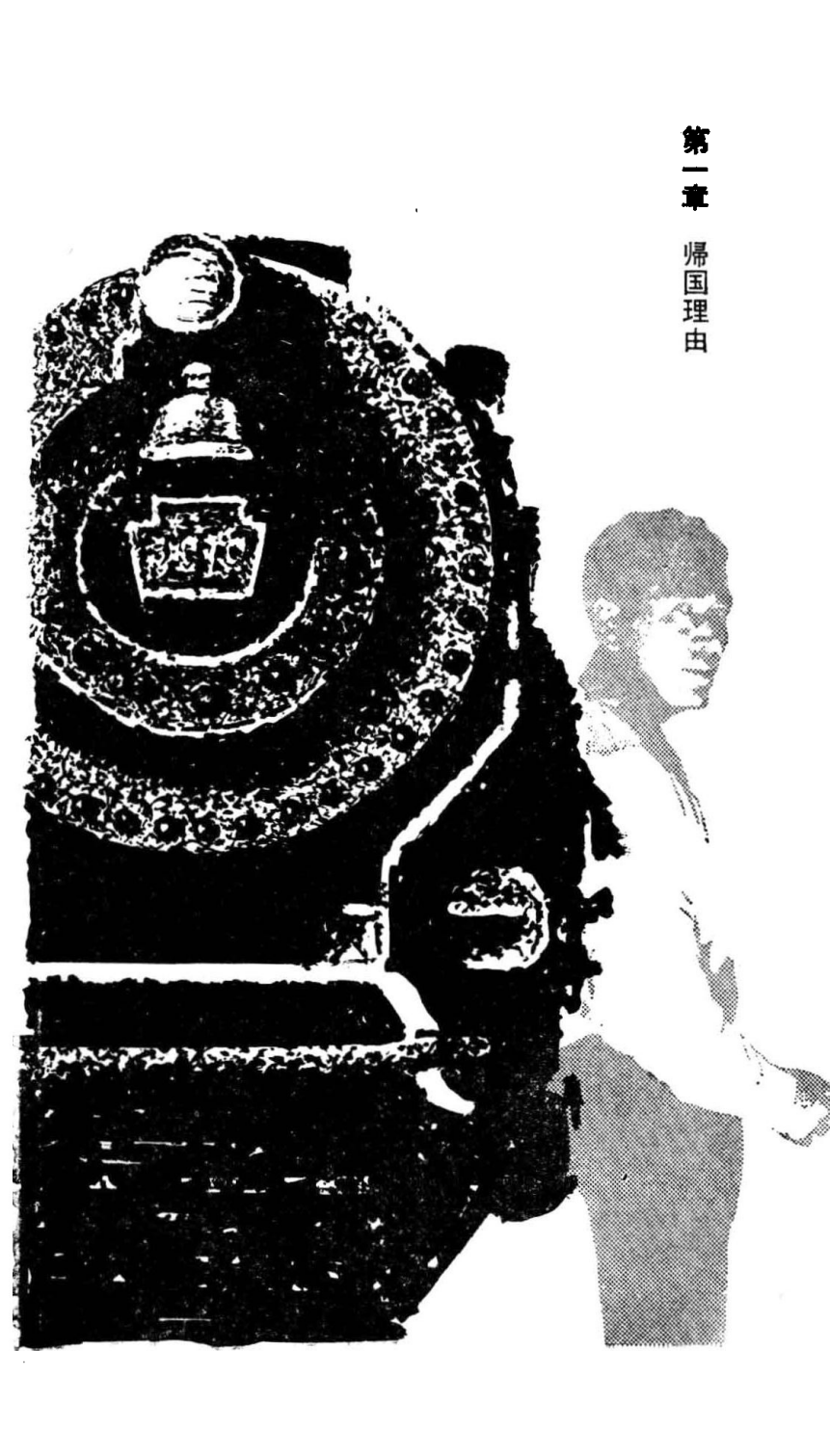
三一書房

シャドウマン／夜の旅人　目次


第一章　帰国理由　5
第二章　湖影　37
第三章　アルファ作戦　77
第四章　黄色い手　111
第五章　香港からきた踊り子　145
第六章　ミスター"A"　175
第七章　十一月の長い夜　211
第八章　切札　241
終章　許されざる者　269


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

# 第一章 帰国理由



低く雲の垂れこめた蒸し暑い日であった。
いままで上空を旋回しながら待機していたコンベア機が、曇り空を引き裂くようにして舞い下りてきた。
その鋭い金属的な爆音に、クスモ外相は猪首をすくめた。
どうして空港というものは、どこの国でもよく似たものだが、こんなに暑くてガソリン臭いのだろう。
彼は肥っていたのでよく汗をかいた。
朝食のあとで、すでにワイシャツを着替えたばかりだというのに、もう胸のあたりがべっとりと身体に貼りついてどうにも気持がわるい。気になりはじめると、ワイシャツを替えるまで落着かなくなってしまうのだ。
それにしてもトウキョウは湿度が高い。
いや、高いのはボルテージの方かもしれない。
自分の国のクアラ連邦では、みんなが昼寝している午後の時間でも、東京は目まぐるしく立ち働いている。
だが、とにかくこれで日本訪問のスケジュールはすべて終った。
今日中には、ゴム園の向うに夕陽の沈む自分の邸へ帰れるのだ。
うなだれた猪首を前へ突き出すようにして、彼はDC—8(エイト)機の待っているスポットへ急いだ。
一等座席(ファースト・クラス)なので、タラップは機首よりになっている。

出国手続がすんでいる以上、ここはもう日本国内であって、日本ではない。
グランド・ホステスが、タラップの昇り口で乗客名簿のチェックをしていた。
「グッド・モーニング・サー」
いきなり耳軟かい女声がとび込んできた。
タラップを踏むために、うつむいていた顔を、彼は起こそうとした。
その眼の前に白い女の手がさし出された。
「サンキュー」
外交官の習性で、彼はすぐその手を握り返した。今朝から、すでに何十人となく握手をくり返して、手の感覚が麻痺していた。ひどい時には、握手のために脹れ上ることさえあるのだ。
なめらかな感触の手であった。思ったより強く、その女は握りしめてきた。
ちくっと何かが指腹を刺したようだが、多分彼女の指輪の金具にでも引っかかったのだろう。
「大臣」
先導していたアジア部長が、ふり返って目くばせした。
なんとなく指腹を気にしているうちに、もうタラップの最上段まできてしまっていたのだ。
クスモ外相は、物慣れたポーズを作って、送迎デッキをふり向いた。
一斉にカメラのシャッターが切られ、撮影機が廻りはじめた。
フィンガーに詰めかけた日本側の見送人たちは、万歳をさけびつつ、小旗や手をふっている。
これが最後のお勤めなのだ。
クスモ外相は満面に笑みをたたえて、高々と帽子をふった。

随行員たちも、彼にならって最後の愛嬌をふりまいている。
長い時間がかかったようだ。
正午近い陽光が雲間を洩れてぎらぎら射し込んできた。
胸ばかりか、背中までワイシャツが貼りついて、汗の伝うのが分った。
もういいだろう。いつまでサービスしたって限りがない。彼は、帽子を頭上におさめた。
「さあ行こう」
まだ手をふっているアジア部長を促して、機内に入った。
その薄暗くみえる入口に、スチュワードとスチュワデスが待ち構えていた。
クスモ外相は、むっつり唇を引き結んだまま、通路を歩んだ。
「ジスウェイ、プリーズ」
VIP（最重要人物）の乗客を迎えて、スチュワデスは精一杯サービスに勤めている。
ダグラスDC—8型の一等座席（ファースト・クラス）は、一番機首に近い席の左側が、1A、そのとなりが1B、真ン中の通路を隔てて、1C・1Dと四席ずつ七列ならんでいる。
つまり満席になると、二十八人の乗客という訳だが、ふつう、六、七〇%位しか乗ってはいない。
そのうち、クアラ連邦のクスモ外相の一行が十三名乗り込んだのだから、ほとんど借り切りにひとしかった。
まだフィンガーのあたりには、辛抱強い日本側の見送人たちが鈴生りになっているが、いくら遠眼のきく男でも、この薄暗い小窓の内側まではよく見通せまい。
クアラ連邦の一行は、上衣をぬぎ捨て、彼ら以外には通じないクアラ語を声高に話し合ってくつろぎは

じめた。
「ファスン・シート　ベルト」と「ノースモーキング」のサインが出ていた。
機内放送はライフベスト（救命胴衣）の使用法を説明していたが、誰も聞いている様子はなかった。
なんといっても外国へくると気骨が折れる。
クスモ外相は、自国語の喧騒に包まれながら、軽く瞑目した。
アメリカ製のＭＩ小銃は、古くさいばかりかクラア連邦の兵士たちの体格に合っているとはいえない。
その点日本製の自動小銃はたしかにアジア人向きで、性能もアメリカ製に優っている。
おまけにＮＡＴＯ制式の七・六二三ミリ弾薬が使えて、発射薬を一〇％減量して軽くできている。
連発で毎分約五百発というすばらしさなのだ。
あのサンプルとカタログを見せれば、おそらく国防省も購入契約にＯ・Ｋするだろう。
しかし、六一式の戦車までは、とても手が出せまい。
そうそう日本から買いつけてばかりはおれないのだ。
だが、それよりも問題なのは、日本とスラカルタ共和国の連携をどう突き崩すかということだ。情報によると、スラカルタ共和国は、海軍力を増強するために日本製の小型艦艇をほしがっているということだが、もともと同じ祖先をもつスラカルタ人とクアラ人が、ともに日本製の武器を持って戦うというのは、どうにもやりきれない。
アジア人というものは、どうしてこんなに同じアジア人を軽蔑し合って、欧米人の庇護を受けたがるのだろうか。
彼は、通路を隔てた右側の座席にかたまっている白人旅客たちの方へ視線を走らせた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

DC—8機は、すでにスポットを離れ、エプロンから誘導路へと走り出していた。
滑走路へ出るまでに待たされる時間が厭だなとすこしいら立った。
けれど、そんなに待つこともなく、滑走路わきの草むらをなびかせて、DC—8機は全力疾走をはじめた。
空間を引き裂くようにして上昇する機内は、すこし揺れた。
瞑目しながら、クスモ外相は、微笑外交の疲れをかみしめた。
すでに雲上に抜け出したとみえて、眩しい陽光が窓に射し込んできた。
「プリーズ」
耳許にやわらかい女声が囁かれて、クスモ外相は、とじた瞼をあけた。
日本機らしい心づかいのおしぼりが竹を編んだ容器の上に添えられていた。
とっくにベルト着用、禁煙のサインは消えていたのだ。
「サンキュー」
シートに沈み込んだ身体を起こそうとすると、指先がしびれていた。
どうやら年のせいで血液循環が悪くなってきたようだ。
ベルトを解こうとしたが、どうにも指先が動かないのである。
微笑みながら、ホステスが、それをはずしてくれた。
そして、膝の上に開いたままの掌におしぼりを置いて行った。
だが、クスモ外相には、そのあたたかいタオルをひろげて、汗ばんだ顔を拭うことがもうできなくなっていた。

なぜだろう。
肘を使って、彼は、上体を前へ引き起こした。
どうやら左手は動くようだが、右手は、すでに手首から肘、そして上膊部のあたりまで全く麻痺していた。
棒を肩から垂らしたようなものなのだ。
どうしてこんなことになったのだろう。
クスモ外相の黒い額に大粒の汗がびっしり滲み出してきた。
機長が、機内放送を通じて、メッセージを送っていた。
それが虫の羽音のように小さく聞えるばかりなのだ。
「タムリン！」
後部座席にいる秘書官を呼ぼうとしたが、もう首が廻らないのである。
できるだけ大臣をくつろがせようとして、二つの座席を取っておいた秘書官の配慮が厄いして、彼には人を呼ぶことができなかった。
DC—8機は、高度一万メートルの高空を時速九〇〇キロメートルで飛行しつづけていた。
「タムリン」
ふたたび彼は、唇をけいれんさせて、秘書官の名を呼ぼうとしたのだが、それは呟きにすらならないほど弱くかぼそいものにすぎなかった。

首相官邸は女気のすくない乾いた建物であった。
帝国ホテルを建てたライト氏の設計によるものなので、いまではすっかり古めかしくなっている。
空気調節の行きとどいた現代風の建築とはいえないので、なんとなく濁った熱気が淀んでいて、あまり居心地がよいとはいえない。
二・二六事件当時の弾痕が残っていたり、岸元総理が刺された場所などという、血なまぐさい遺跡まで内蔵しているのである。
その首相官邸二階の小部屋から、窓の外を眺めている一人の男がいた。
濃紺の背広に、同色のネクタイを結んでいるが、その広い肩幅は、背広からはみ出しそうな程いかって分厚かった。
スポーツマンタイプというよりは、武術家といった印象が強い。
腕組みをして、男は、夏空の下にひらけている永田町から山王附近を眺めていた。
ちょうど目の下に、時々園遊会などにも使われる広い芝生が青々としげっていて、灰色の作業服をきた清掃婦たちが、黙々と手入れにいそしんでいる。
その真正面に、白っぽいアカサカ・ホテルが、そびえ建っているのだ。
もしあの屋上から、狙撃銃かマシンガンで狙い射たれたなら、それこそ重要会談中の首相はじめ全閣僚の安全は全く保証しえない。

2

ここは、あまりにも無防備すぎる。
ところで、そうした攻撃を未然に防ごうとすれば、どうすることが一番安全で早道だろうか。
彼は、そんな地形による作戦を空想した。
「松原君」
顔見知りの首相秘書官が背後から呼びかけた。
「会議の席へ御案内しましょう」
秘書官に先導されて、彼は小会議室へつれて行かれた。
安楽椅子にからだを預けて、組んだ脚先をぶらぶらさせている首相と、その隣席で煙草をふかしている外相とが、すぐ目についた。
「松原健策君です」
言葉短かく、秘書官が紹介してくれた。
四十五度ぐらい上半身を折り曲げて、松原は挨拶した。
軽く、首相はうなずいたまま、外相の方へ顔を向けた。
「それで君、クスモ外相の毒殺というのは、たしかなんじゃろうね」
太い眉毛が一言ごとにひくひく揺れ動くのであった。
「どうやら間違いないですな。なにしろ、羽田発一時間足らずで、機内食を運んできたホステスが、すでに息絶えているクスモ外相を発見したというんです。たちまち騒ぎになったが、どうすることもできん。むろん、ドクターが随行していましたから、応急手当をしたそうですが、もはや手の施しようがない。といって、外部へ洩れては大変だから、そのままクアラへ帰るまで、病人を装い、本国へ到着すると同時に、

病院車を呼びよせて、国立病院に運び込んだというんです。その結果、毒物が発見され、推定死亡時刻は羽田発十数分後の十一時二十分頃、死因は、そのクラーレによる呼吸機能の麻痺と判明したそうです」

しわがれた声の外相は、白髪を振り立てながら説明を行なった。

「むろん、公式には、急病のため入院したが、薬石効なく死去したということに体面を取繕うてありますが、向うとしては、こっちを怨んでますよ。そこで、その下手人の発見を、内密に依頼、というよりは厳命に近いやりかたで通告してきた次第ですがね」

「ふむ」

気むずかしそうに眉根をしかめて、首相は天井をふり仰いだ。

「毒殺かね、やはり」

「現地からの知らせによると、右手の薬指に、針の先で突いたほどの小さな傷跡が発見されたそうで。そこからクラーレが体内に入ったことはほぼ確実です」

外相は、随行してきたアジア局長をふり返った。

「総理、それに関する報告書を持参しました」

一綴の書類が丸卓の上に置かれた。

現地の大使館から送られてきた極秘情報なのである。

「ところで、このクラーレちゅうのは、どんな物だね」

その質問を待ちかねていたように、アジア局長は、ポケットからメモを取り出した。

「もともとは矢毒でございます。英語で毒薬のことをポイゾンと申しますが、これはギリシャ語のトキソンを語源とする言葉でして、トキソン、すなわち矢毒を意味するのでございます。それほど毒薬の歴史

は矢毒と深い関係がございまして、各種の矢毒が戦闘用もしくは狩猟用に用いられております」

「それで、クラーレはどうなんだ」

一見鷹揚な風貌の首相だが、実はひどく気が短かい。いら立ちやすい性格なのだ。

「はい、クラーレと申しますのは、十六世紀頃、南米から欧州へ伝わりました矢毒の一種でして、ギアナ、ペルー、エクアドル、アマゾン上流などに住むインディアンが使っていたそうです。この毒薬エキスは、欧州に売買され、竹筒に入っている樹脂をツボクラーレ、ヒョウタン入りをヒョウタン・クラーレ、土壺に入れたものを土壺クラーレと呼びまして、それぞれ効力がちがっております。土壺クラーレの方が、ツボクラーレより強力だそうでして、ツボクラーレの成分から抽出したツボクラリンは外科手術の麻酔剤にも上〻使われているということです。ところで、このクラーレが人間の体内に入りますと、たちまち筋肉が痺れて、動けなくなり、やがて呼吸筋が麻痺するために、呼吸さえとまって、死亡いたします。また、このクラーレは内服したのでは効力がありませんために、どんなに小さな傷口でもよいから皮膚を傷つけて体内に入れなくてはなりません。痛みも苦しみもないそうで、ほんの蚊にさされたくらいの傷口で充分目的を果せるそうでございます」

どうやらそのクラーレを用いた犯人は、かなり厄介な相手らしい。

「ふむ、どこからそんな物を手に入れてきたんじゃろう」

手をのばして、首相は煙草を取った。

「それですよ、総理、私はどうも、あちらさんじゃないかと思いますな。由来、われわれ日本人というものは、欧米人とちがって、毒薬で人を殺すことは至って不得手な人種です。国民性からいっても、そういう陰険な方法は性に合わんのですな」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo